モノと情報班 A

分節された空間とその動態について―北ラオスの山地社会からの報告―

清水郁郎（国立民族学博物館）

キーワード：山地社会、アカ、家屋、村落、空間
調査期間と場所：①ラオス、ポンサリー県ブンヌア郡 H 村、ルアンナムター県ムワンシン郡 E 村、2004 年 8 月 9 日～ 9 月 20 日、②ラオス、ルアンナムター県ムワンシン郡 E 村、2005 年 3 月 2 日～ 3 月 20 日

Some remarkable characteristics of articulated space and its dynamics: Report from highland society of northern Laos

Ikuro SHIMIZU, Visiting Research Fellow, National Museum of Ethnology

Keywords: highland society, the Akha, house, village, space

Research site and period: 9th August, 2004-20th September, 2004 at Boonneua district, Phogsali province and Muangsin district, Luangnamtha province. 3rd March-20th March, 2005 at Muangsin district, Luangnamtha province.

1 目的と視座

本報告では、2004 年度に「モノと情報」班の活動としてラオス北部の山地を中心におこなった調査から、とくに「ラオ・スーン（高地ラオ人）」としてくくられるアカを中心にその村落と家屋にかかわる空間の特性について述べる。

ラオス北部の山地には、従来から多様なエスニック・グループが居住していた。しかし、近年のラオス政府の政策により、幹線道路や主要な道路沿いに多くの村が移住、立地するようになった。また、ラオスにおいては、森林資源は政府にとって重要な収入源であったが、早い時期から、村（村人）主導の森林管理と林業の振興がおこなわれていた。ところが、とくに北部では、新規の移住と入植が頻繁におこなわれた結果、在来の慣習（土地利用権や休耕期間）を踏み越えた土地の開墾があった。そうした動きが、1996 年から全国の 1520 村が参加したとされる村ごとの「土地利用地図」の作成へとつながった。この地図が作成されたメリットは、各村落のプロファイリングを明確におこなうことで、各村落の居住空間を村人自身が明確に識別できること、農地の権利書の取得や外部からの違法伐採を防止することなどに認められる。しかし、別の見方をすれば、国家による施策によって在来の居住空間のあり方がどのように変化したのかという疑問も生じる。本報告では、こうした背景を踏まえながら、ラオス北部の山地に暮らすアカの居住空間がどのように組織されているのか、別言すれば、どのように時間的、空間的に構造化、分節化されているのかを、家畜飼養や木材の調達などの側面をまじえながら述べる。

本報告では、「高地ラオ人」とくくられるアカにあっても、その社会はリモートに自律しているのではなく、周辺の諸集団や低地社会との関係性のうえに存立していることを、モノでありなおかつ生活の舞台でもある家屋を中心に検証しながら述べていく。本報告もその一部をなす研究の全体的な構想としては、調査対象村落をほかのエスニック・グループとの関係や低地社会、ラオス政府との関係の構図のなかに布置し、とくにモノとそれをつくり出す自然資源がどのように変化したのかを究明する。本報告はその手はじめとなり、とくに中心的に扱うのは空間の組織だが、これは対象社会をプロファイリングするさいの最初の手続きのひとつである。民族誌的なデータを適宜使いながら、ひとつの社会の空間がどのように組織、分節されているのかを述べて、将来的な調査に一定の方向性を与えておきたい。

図 1：H 村の全体図

2 調査地の概要

現地調査は、ポンサリー県（Phongsali）のブンヌア郡（Bun Neua）にある H 村でおこなった（図 1 参照）。また、補足的にルアンナムター県の U 村においても調査した。ただし、U 村の調査は完全ではなく、次年度以降に集中的に調査をおこなう予定なので、本報告では直接言及はしない。H 村へのアクセスはつぎのようなルートで可能である。ポンサリー県のタイ・ルー（Thai Lue）の村ブン・タイ（Bun Tai）からさらに北上すると、ポンサリー市街から 40 キロほど手前にある同じくタイ・ルーのブンヌア郡にいたる。ここは、郡庁所在地である。ここでポンサリーに向かう道と分枝し、ウー・タイ（Ou Tai）、ウー・ヌア（Ou Neua）、ウー・ニョット（Ou Nyot）などのタイ・ルーの村や中国国境に直接向かうルートに沿っておよそ 24km 北上すると、その道沿いの H 村にいたる。

3 H 村の居住空間

1] 村の概要

H 村の設立は調査時点から 12 年～ 14 年前と言われている [1]。また、ある村人の話によれば、1988 年ころにこの村の住人の大部分は、中国―ラオス間の国境を越えてラオス領内に入った。それ以後、H 村が設立されるまでは近辺の山地に住み暮らしていたという [2]。調査時点で、人口 290 前後、家屋戸数 49 である [3]。村の脇を走る道は、1990 年代の後半に整備され、未舗装ながらも車の往来が不自由なくできる（図 1 ―①）。

H 村には、低地のブンヌアから電気が通っており、中国製のステレオや TV・VTR セットを所有する 7 人ほどの村人の家につなげられている。

村には、2003 年に EU の支援で建てられたラオス政府による正規の学校がある（図 1 ―②）。しかし、教師がしばしば不在となるために、これまでは十分に利用されてこなかった。調査期間中に、郡役所の指示により、教員宿舎用の建物が村人の協働で建設され（図 1 ―③）、ほどなくしてプー・ノーイ（Phu nooi）の女性教師 2 名が赴任してきた。この学校以外に、村には取り立てて目を引く施設はない。

村には、近郊のプー・ノーイの村から通っている女性が営む商店が一軒ある（図 1 －④）。この女性は、調査時点より 10 ヶ月ほど前からこの村に通って来るようになった[4]。また、かつて看護師としてラオ社会で働いていた経験があるので、日用品を売るほかに、薬の売買や点滴の施術をおこなうなど、村人の健康面にも寄与している。

村では、比較的裕福な世帯が、車やトラクターを所有している。車は 2 台、トラクターは数台ある。いずれも中国製で、トラック 1 台が 3500 万 K（キープ）、トラクター 1 台は数百万 K である。

このほかに同村で目に付くのは、いくつかの世帯で所有されている菜園（ya cm）である。村が立地する斜面は石が多く、土が露出している場所は相対的に少ない。しかし、わずかに露出している土の部分には、複数の農作物が小規模ながら栽培されている。高齢のシャーマンがいる世帯 A では、トウガラシ、柑橘系の果実類、タバコの 3 種が栽培されていた（図 1 参照）。世帯 B では、トウガラシ、柑橘系の果実類、キャッサバ、ウコン、グアバ、レモングラス、イモ、コンニャクのほかに花を栽培している。さらにもうひとつの世帯 C では、トウガラシ、グアバ、コンニャク、パパイヤ、ウメを栽培している。果実類や日々の食事で使う香辛料、嗜好品など、その世帯の必要に応じた作物が栽培されている。

2] 伝統的な「指導者」の不在とネオ・ホームの存在

アカは、語る相手に応じて複数の名称を使いながら、自身の帰属を表明することが知られている［清水 2005]。アカ同士が相手を識別するさいにもっとも重要なのが、系譜上で確認されるサブ・グループである。アカの村落の組織について言及する場合、そこに住むアカがどのようなサブ・グループに属すのかを知ることは重要である。ただし、系譜は部外者に披瀝されることを忌避される傾向がある。そのために、この調査では、ロトゥン（Lo tm）[5] というサブ・グループの名称ひとつだけを確認できた段階である。

社会生活全般を覆うものとして宗教的側面も重要だが、この村の村人はすべて祖霊や自然界の霊の存在を信じる、いわゆるアニミストである。

アニミストが構築する社会空間を仮に「慣習的世界」と呼べば、それを組織するアカのあいだには伝統的な役職者が複数存在すると考えられる［清水 2005］。村の所有者とされ、政治・宗教的側面を担う伝統的な「指導者」、祖先や神格的存在がかかわる数々の儀礼において呪的ことばを暗証する「暗唱者」、村人の健康面、とくに病気回復や治療などにその力が利用されるシャーマン、鍛冶師などである[6]。

H 村では、行政との橋渡しをおこなう公選の村長[7] のほかに、シャーマンと「暗唱者」が存在することが確かめられた[8]。また、「指導者」と目される男性の存在も確認できたが、「指導者」は実質的に活動していない。それは、つぎの側面からも理解できる。アカの村に通じる道には、いわゆる「門」が建設されるのが通例である。この門は、慣習的世界に生きるアカにとって、森林に住む霊的存在に人の居住領域を明示するもので[9]、「指導者」の所有物とされる。それが画する領域のいっぽう、すなわち門の内部は、「指導者」の所有する空間である。しかし、この村では門はすでに建設されなくなっており、その痕跡を確認することもできなかった。また、「指導者」が門を建設しなくなって数年たっていることが複数の村人の話からも確認できた。こうしたことから、少なくとも「指導者」の居住領域としての H 村のありかたは、現在では弱まっていることが推測できる。しかし、この点は、「指導者」がかかわるいくつかの儀礼、「土地や水の所有者」への供犠や籾コメの播種にかかわる儀礼、ブランコ（1 －⑧）を建設する儀礼などがどのように変化しているのか、そうした儀礼において「指導者」がどのような役割を担っているのかを見定めて結論を出す必要がある。

「指導者」に代わって村の政治・宗教面で力を持っているのは、ラオ語で「ネオ・ホーム」と呼ばれるいわゆる「長老会議」のような集団である。これは、40 代後半以上の数人の男性により組織され、数年ごとに公選されるという。公選の村長の年齢は 40 代前半とまだ若く、調査時に観察した限りではそれほど権限も発言力も強くない。代わりに、村のさまざまな公的行事でおおきな発言力を持つのは、政府の行政組織の一部であるこのネオ・ホームである。このほかに、村長の補佐役 2 名、軍と警察関係の者がそれぞれ 1 名、女性・子供関係の役員、動物への加療、人への加療を担当する者がそれぞれ 1 名ずついる。さらに、かつてはタ・センと呼ばれた郡の下部組織があり、その長を担っていた老人がひとりいる[10]。

3] 生業と経済：農耕と家畜飼養

H 村では、陸稲の栽培を中心とする農耕がおこなわれている。また、家畜の飼育も一般にみられる。試みに、いくつかの世帯でその状況をみてみよう。

表 1：世帯の経済状況（2003 年～2004 年）

世帯	栽培している作物	飼育している動物	現金収入
世帯A（村長補佐）	コメ 豆 トウモロコシ ゴマ	スイギュウ2頭 ブタ2頭 ニワトリ5羽 犬7頭	コメ（230 キロ、キロ当たり 1300K で計算）：20 万～30 万K スイギュウ：100 万K
世帯B	コメ	スイギュウ1頭	？
	トウモロコシ	ブタ5頭 ニワトリ 10 羽 犬1頭+子供数頭	
世帯D	コメ トウモロコシ カボチャ	スイギュウ1頭 ブタ7頭 ニワトリ 20 羽	粳コメ 4t の収穫：そのうちの大部分を売って数百万Kの収入→トラクターの購入 ブタ2頭：大60～70 万K、小30 万K
世帯E		スイギュウ2頭 牛1頭 ブタ21 頭 ニワトリ 20 羽	？
世帯F	コメ トウモロコシ カボチャ 落花生	スイギュウ2頭 ブタ1頭	コメ 2t：いくら売れたか不明

ここにあげたのはごく一部の世帯の例である。コメは、モチ種とウルチの双方を栽培する。また、コメの収量は多いが、自給と翌年の籾ゴメ用にかなりの部分を使う。ほかの野菜はおもに自給用で、少量をブンヌアの市場で売っている。この村でもっとも確実に現金を得ることができるのは、家畜、とくにスイギュウとウシ、ブタである。まとまった現金を得る必要があるときには、こうした家畜を売る。実例を、菜園に関して先に述べた世帯 B での例からみてみよう。この世帯は、2003 年 10 月から 2004 年 1 月までのあいだに平屋建ての家屋を新築した。家屋建設は車の購入と並んで、この村の住人にとってもっともおおきな出費だが、以下のようにその出費は 1109 万 K にも上った。また、直接の建設費だけでなく、建設工事の賃金、適宜おこなわれたまかないの費用を加えると 1500 万 K に近い出費があった。

表 2：家屋の新築における出費

建設費内訳	数量	単価（キープ）	小計
レンガ	1 万個	@220K	220 万 K
屋根スレート	100 枚	@2 万 4 千 K	240 万 K
セメント	3t	@75 万 K	225 万 K
砂	自前	—	—
鉄（釘）			40 万 K
天井板	20 枚	@2 万 K	40 万 K
構造材	自前	—	—
窓（枠を含む）	2 箇所	@20 万 K	40 万 K
扉（枠を含む）	5 箇所	@50 万 K	250 万 K
白色ペンキ	40L	@20 万 K/20L	40 万 K
緑色ペンキ	5L	@2 万 K/1L	10 万 K
赤ペンキ	2L	@2 万 K/1L	4 万 K
		総計	1109 万 K

この世帯では、これらの出費をつぎのようにまかなった。

表 3：建築費用の捻出

スイギュウ	2 頭	@200 万～250 万 K	400 万～500 万 K
ブタ	4 頭	@70 万～90 万 K	280 万～360 万 K
ウシ	3 頭	@100 万～120 万 K	300 万～360 万 K
コメ	4 トン	@1300K/kg	520 万 K
		合計	1500 万～1740 万 K

4] 岐路に立つ村の経済

冒頭に述べたように、ラオスでは、1996 年から、北部山地に点在する各村落を中心として村ごとの「土地利用地図」の作成がおこなわれ、現在も継続中である。この「土地利用地図」において示される H 村の範囲は、以下のようになっている。

ここで、生産農地は 428ha と示されているので、それを村の世帯数 49 で割ると、1 世帯あたりの割り当て農地はおよそ 8.7ha になる。

写真 1：利用計画地図の実際

表 4：H 村における土地と森林の利用計画地図

利用種類	色の区別	広さ
保護林	深緑	362ha
使用済みの保護林	赤	315ha
利用可能な森林	黄色	474ha
改良林（植林）	黄緑	205ha
生産農地	緑	428ha
家畜飼育地	黒	
水田	辛子色	7.26ha
川	黒	
道	赤	
村の境界	黒点線	
建築用土地（村）	黒ポイント	3.5ha
墓地	黒□	5ha
その他		20.4ha
合計		2111.52ha

このように、一応は数値的に、この村の居住空間の全体像を把握することは可能である。しかし、村人の生活の内実を知るには、現実にこの村で生起している事象も補足しておく必要があるだろう。この村が建設された当初、国家による土地の管理はなく、焼畑を自由におこなうことができた。当時は、コメとケシが大規模に栽培されていたという。コメは自給用に、ケシは他エスニック・グループ、他サブ・グループ間で売買され、村人に貴重な現金収入をもたらした。また、農耕にかかわる労働の代価としても多く使われていたという。しかし、国家による管理がおこなわれる現在、少なくとも表立ってケシの栽培はできない。また、「土地利用地図」の作成が最終的に焼畑の全面禁止に向かっていることに、村人はおおきな不安を抱えている。

村長は、こうした現状において、政府、NGO や NPO などの非政府系組織によって、換金作物の導入や水田耕作への転換が主導されていくことを強く求めている。この村では、生業形態の大規模な転換を図ることができるような資金を村人自らが獲得するのは困難だからである。

その理由のひとつは、ブンヌアをはじめとして、近郊に農作物を売買するようなネットワークが存在しないからである。コメと家畜を売る以外に、現金収入を得ることはできないのである。ヴィエンチャンのような都市部では、各種の野菜の需要が高い。しかし、この地域でそうした野菜を栽培しても、ヴィエンチャンにまで輸送する手段もそれを仲介する仲買人も存在しない。この地域には、かねてから、ブタとスイギュウ、ウシを仲買する中国人の商人がいるというが、そうした中国人も、野菜の商売をすることはない[11]。したがって、換金作物の栽培はほとんどみられず、村人の労働の大半は自給用のコメと家畜の餌用のトウモロコシの栽培、家畜の飼養に向けられることになる。

調査期間中に、郡が主催するセミナーがブンヌアで開かれた。これは、H 村をはじめとするブンヌア近郊の山地民の村から代表者（村長）を呼び、ブンヌア地域社会のこれからの生業について話し合うというものだった。そこで具体的に出された議題は、近年、北部山地で急速に広がりつつあるゴム栽培の可能性だった。各村で中国企業から無償で配布されるゴムの苗木を植え、収穫後は中国に輸出するというものである。セミナーは、栽培するという方向でまとまったが、それに先んじて、対象とされるべき村の生業と経済状態を郡側が調査し、どの村に重点的に資金が投入されるべきかが話し合われたという。

4.H 村の家屋：空間の組織と力学的構造

先述のように、村が立地する斜面は石が多く、土が露出している場所は相対的に少ない。それゆえに、家屋の建設にしても、柱を土に掘っ立てることはまれで、適当な大きさの石を地面に直に置き、置き基礎としてその上に柱を立てるという形式が多くみられる。

H 村の家屋（nym）は、おもな生活面全部を地面から離した床面上でおこなう「高床式（nym go）」と、就寝は高床の上でおこなうが炊事・食事は地面でおこなう「半高床式（nym aw）」に分けられる。後者の場合、斜面から束を立ててその斜面上に張り出すかたちで就寝空間をもうける場合と、平らにならした地面に束を立てて就寝空間の床面をつくりだす場合がある。H 村では、高床形式の戸数は 13、半高床形式の戸数は 36 である。

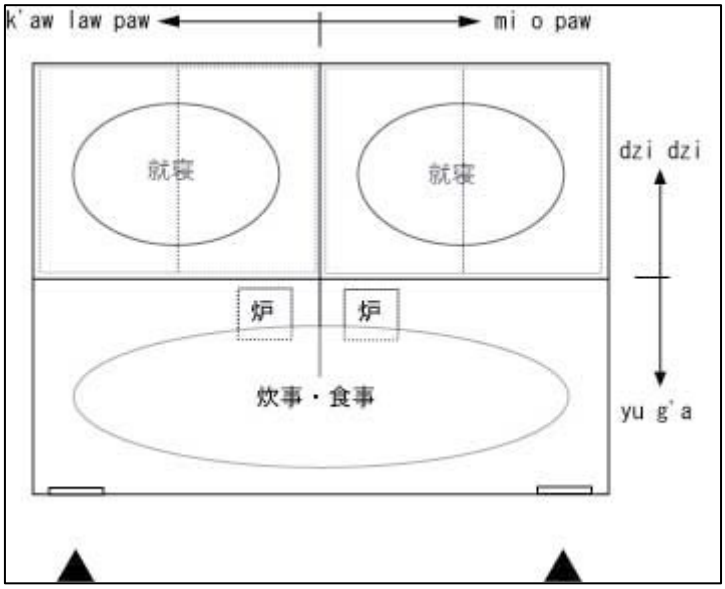

図 2：空間名称モデル

この村の家屋のおおきな特徴は、高床、半高床にかかわりなく、家屋の内部空間の組織にいくつかのヴァリエーションがみられることである。これは、ほぼ同じ内部空間の組織がみられる北タイ山地のアカの家屋と比べたときの際立った違いである［清水 2005]。図 2 は、H 村における家屋空間のモデル図である。内部は、中央の仕切り壁（pi ka）によって、それぞれ k' aw law paw と mi o paw と呼ばれるふたつの空間に分割されている。しかし、そのそれぞれを男女の社会関係や生業の分業に結びつけて説明する傾向の強い北タイのアカとは異なり、H 村の村人からは、そうした説明は今のところ得られていない。

外部からアプローチするとき、もっとも近い開口部側から入ったところが mi o paw である。この部屋を手前や表側と考えた場合、k' aw law paw は奥や裏側にあるとみなすことができる。

家屋の内部空間はまた、敷居によって、dzi dzi と yu g' a と呼ばれるふたつの部分に分かれており [12]、この地域のアカの家屋の際立った特徴である [13]。谷側には、就寝空間である dzi dzi が配置され、山側には yu g' a が配置される。そして、この dzi dzi と呼ばれる谷側の空間には、居室がひとつまたは複数つくられ、拡大家族的な集団を組織する世帯内の各夫婦がそれぞれの部屋に就寝するというかたちである。したがって、複数の夫婦を抱える世帯は、こうした就寝用の居室がそれら夫婦の組だけつくられることになる。

高床式と半高床式の違いにかかわらず、家屋は梁の上から立つ束が棟木を支える構造が多い。ただし、少数ながら、床面の上から立ち上がる棟持柱が、そのまま棟木を支える構造もある。また、両者に共通して、北タイ山地の家屋につけられるような登梁はみられない。これは、家屋自体が小ぶりであることと、屋根の勾配がそれほど急ではないということに関係すると思われる。梁の上方には母屋梁や天秤梁、小屋貫が配置され、屋根の小屋をかたちづくる。以下では、上記の記述を実例で検証してみよう。

1⊠ 高床式家屋

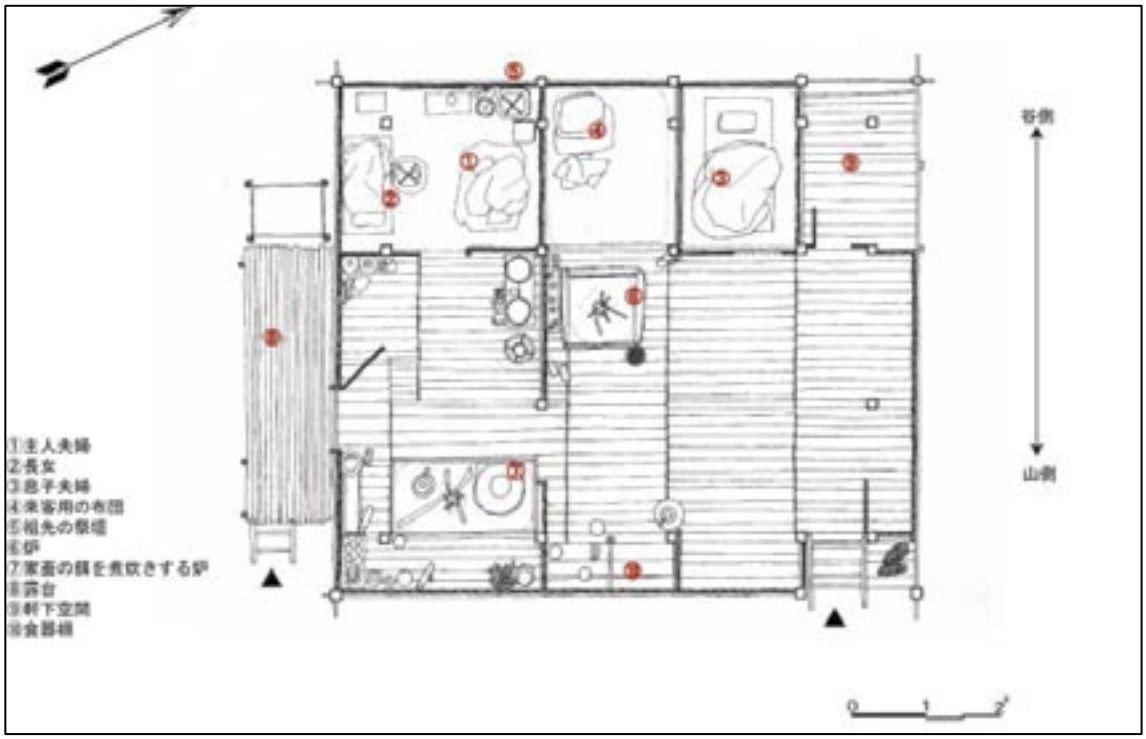

図 3：高床式家屋のプラン

最初に取り上げるのは、高床式の家屋の事例である（図 3 参照）。屋内は、梁間 4 つ分の空間からなっている。図の右下側の入り口が主要な入り口で、谷側を向いた階段（ga dzm）がそこには取り付けられている。その入り口から入り、中央の壁までの部分は、おもに男性が使用する空間（mi o paw）である。炉（tsaw g’ o）の奥の谷側の空間は来客者のために確保してあり、普段はあまり使用されないという。その横には、壁で仕切られた居室があり、そこには、息子夫婦とその子供が寝る（図 4 参照）。主人夫婦と次男は、奥の空間（k’ aw law paw）のやはり壁で囲まれた一室の中央壁際に寝る。また、長女も主人夫婦と同じ部屋の壁際に寝ている。主人夫婦の寝場所の谷側の壁付近には、祖先祭祀に使われる道具と祖先をまつるいわゆる「祭壇」がある。

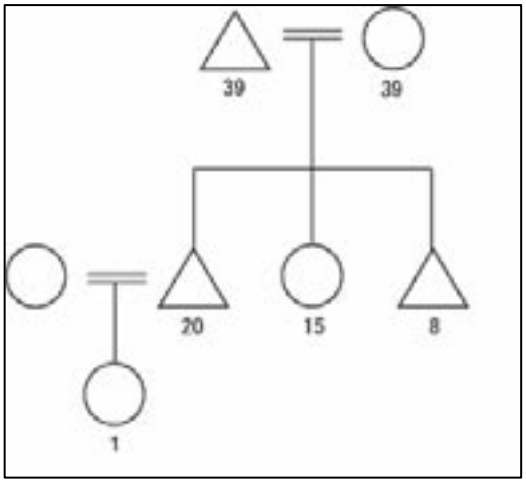

図 4：高床式家屋に住む世帯の構成

男性の居室の一画、谷側の隅には扉があり、その外は軒下空間になっている。イスがいくつか置かれており、家人や来訪者の談笑の場になっている。男性の部屋の山側には、食器棚（u bah kaw law）がつくりつけられている。そこには、食器のほかに、水を汲んだり溜めたりするための容器がいくつか置かれている。

この家屋に暮らす世帯は、調査時点から 7 年ほど前にこの村に移住してきた。家屋は、4 年ほど前に建設されている。比較的小ぶりな高床形式の家屋で、先述した特徴のほかに、奥の居室に家畜の餌を煮炊きするための、土を盛ってつくったおおきな炉（tsaw）がある。奥の居室にある戸口を出ると、木を渡した露台（gui ga）になっており、その谷側の先にはニワトリ小屋がある。また、床下（u mo）ではスイギュウを飼うほかに、家屋の横にブタを飼育する小屋（g’ a ku）がある。

床材にはマイ・チャンパーを、また柱や梁（doe tsah）などの構造材にはマイ・ニュンやマイ・トゥロを使用している。屋根（nym m）には、バイ・コーと呼ばれる扇形の葉を編んで葺いている（表 5 参照）。

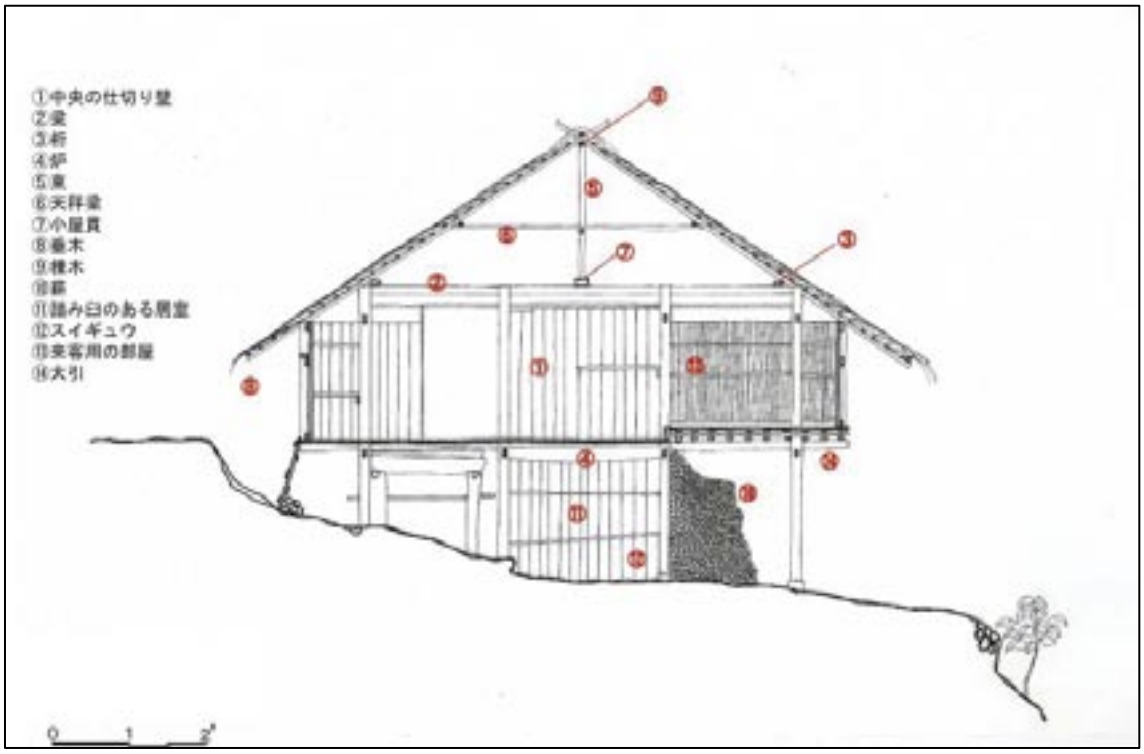

図 5：高床式家屋のセクション（妻側）

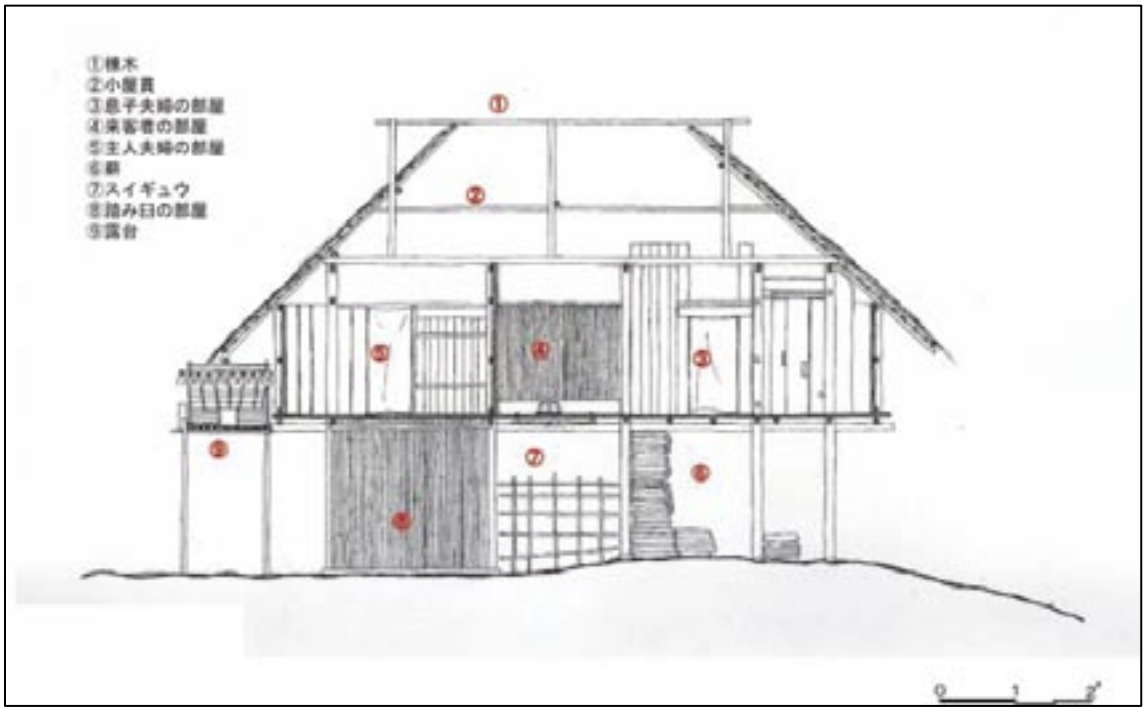

図 6：高床式家屋のセクション（平側）

屋根の形式だが、タイ北部や中国雲南省に多い入母屋形式の屋根は、同村では少ない。もっともよく目にするのは、切妻の屋根を持ち、なおかつ妻面から斜めに屋根を葺くという形式である。この理由のひとつは、破風の出が少ないことがあげられる。その形式は、この村や他村のアカばかりではなく、ほかの民族集団、たとえばプー・ノーイやタイ・ルーの家屋でもみることができる。この家屋は、珍しく入母屋になっている（図 6 ～ 7 参照）。ただし、破風の出は少なく、懐はそれほど深くない。高床と半高床の区別なく、屋内の梁より上の部分には天井をはっておらず、そのために屋根の構造がむき出しになっている。

表 5：家屋の部材として使われるおもな樹木

樹種		
ラオ語	アカ語	備考
マイ・トン・コーク	Ja ba	種々の部材として使用。葉が大きい。焼畑を 2 回以上おこなった後に出てくるとされる。
マイ・トゥロ	Si sa	種々の部材として使用。構造材として多用される。幹の表面がザラザラしている。
マイ・コー	Tsi ne	種々の部材として使用。幹が白と茶のまだら。
マイ・コー	Tsi sheh	種々の部材として使用。ひとつの根からたくさんの幹が出る。
バイ・コー	Caw pa	屋根材として利用。
マイ・チャンパー	Pah lah	種々の部材として使用。構造材として頻繁に使われる。
マイ・サック	Ma sa	構造材として利用される。
マイ・ニュン	Dzui	構造材、壁材、床材として広く利用される。

2] 半高床式家屋

つぎに取り上げるのは、平らにならした地面に束を立てた半高床式の家屋の事例である。世帯には主人夫婦のほかに 7 人の子供がいるが、長男と次男はこの村に住んでいない（図 7 参照）。理由は不明である。また、長女と次女はすでに婚出しており、この家屋に暮らすのは、主人夫婦と 3 女、3 男、4 女である。

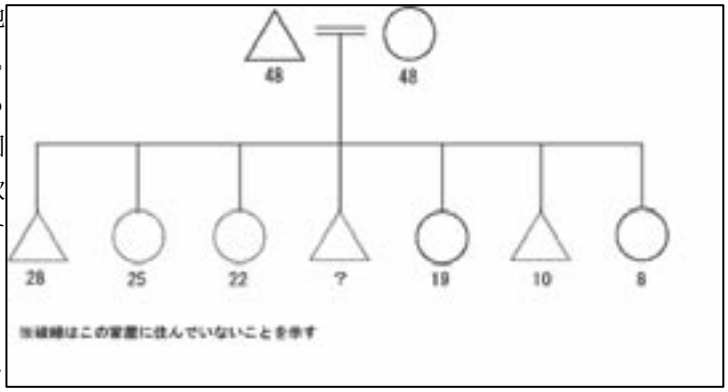

図 7：半高床式家屋に住む世帯の構成

この家屋の特徴のひとつは、壁を土でつくっている点である。壁厚は 40cm ほどもあり、独特なプロポーションを見せている（図 8 ～ 9 参照）。また、床は地面を掻いてフラットにしてあるが、主要な入り口側の居室には不完全ながらセメント・モルタルが打たれている。

主要な入り口側にある手前の居室（mi o paw）は、奥の居室（kaw law paw）よりもかなり広い。土間空間は、来客の接待に使われるほかに、来客の食事を調理するさいに置き石の炉が使われる。また、床上空間は、寝台が 1 台あるきりでほとんどモノが置かれていない。来客が就寝する場所と説明される。

奥の居室の床上空間には、板で囲まれたふたつの居室がある。広い方には主人夫婦と 3 男、4 女が就寝する。そこには、祖先をまつる祭壇と祖先祭祀の道具がある。隣の細い部屋には 3 女が寝る。これらの居室前の土間空間は、調理や食事の場所となる。山側の壁際には土を盛ってつくったおおきな炉がある。戸口の外には、踏み臼が設置されている部屋が、家屋に連接してあり、その前には板を組んだ低い露台がある。

屋根の特徴として、勾配が緩やかなことがあげられる。チガヤなどの草を葺いているわけではないので、勾配が緩くても雨への対処は可能だが、この村のほかの家屋と比べてもその勾配の緩さは、際立っているように思われる。妻側の破風には、竹を網代に編んだパネルが取り付けられている。

谷側の外壁の外側にはニワトリ小屋があるほかに、近年亡くなった家人の葬式で、供犠したスイギュウをつないだ木がそのまま残されている [14]。

主人によれば、この家を建設したのは数年前にさかのぼる。建設費は、平屋であることと土壁であることゆえにそれほど多くかかっていない。建設後、数年をかけて少しずつ手を入れて、現在のかたちになった。たとえば、屋根には、2004 年に市場で購入したスレートを葺いた。1 巻 12000K のものを数巻、ブンヌアで購入したという。

梁の上に立つ束を含めた柱のほとんどは、マイ・チャンパーが使われている。また、屋内の壁材には、マイ・ニュンが使用されている。

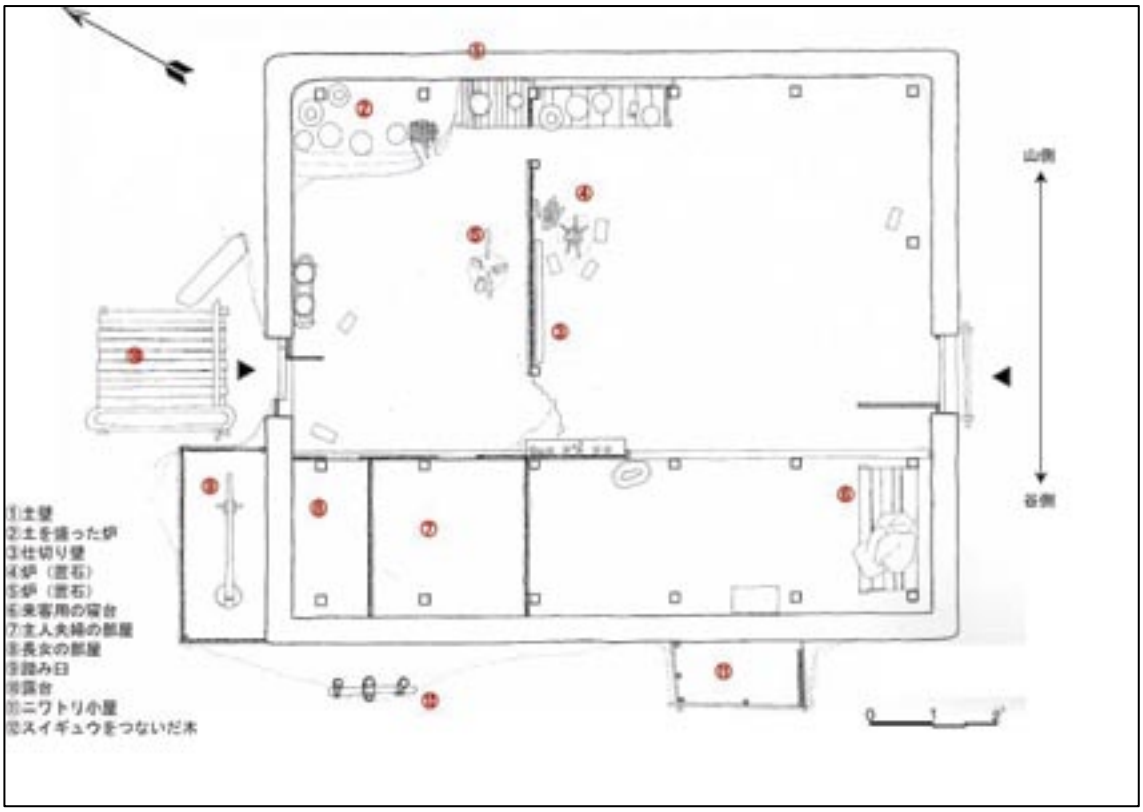

図 8：半高床式家屋のプラン

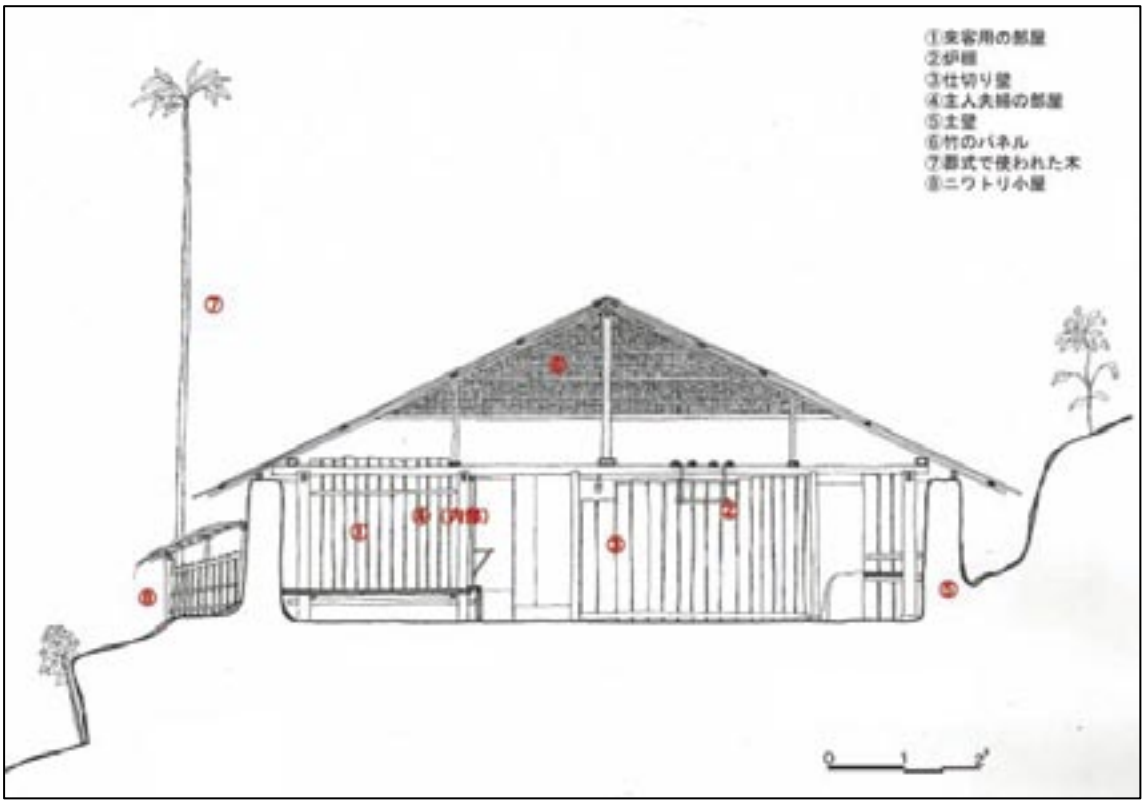

図 9：半高床式家屋のセクション

5. まとめ

人類学的家屋研究の文脈では、社会的に構造化され、なんらかの指標をもとに分節された空間（村落空間）と家屋空間とのあいだには、連続性が見出されると考えられてきた［cf. Waterson 1990］。しかし、H 村での調査

では、現在までのところそのような連続性を指摘するのは難しい。もちろん、調査の深度が十分でないこともその一因だが、それ以上に、村落の揺れ動く現在的状況を考慮する必要がある。

村落の領域、つまり人の居住領域を示す指標となる門が存在しないことに代表されるように、社会的に構造化された空間としての H 村の姿は弱々しい。それは、アニミストの村でありながら、それを主導するべきリーダーが不在だからである。代わって、政治的な色合いを強く持つネオ・ホームが行政的村長と協働で村落を主導する。しかし、慣習的なリーダーが宗教的・儀礼的な資質をベースに村落を主導し、村人もそのリーダーのもとに集団としてまとまってきたかつてのアカ社会の様態と比べれば、両者は儀礼・宗教的な資質に富んでいるわけではない。さらに、政治・経済的な側面における外部との関係性がいまだ流動的で脆弱なこの村落では、両者は強いリーダーシップを発揮していないように映る。

村落空間の構造化、分節化が脆弱であることと、本報告内で指摘した家屋空間の組織に多様なヴァリエーションがあることのあいだには、なんらかの関係があるのだろうか。この点は、村人の家屋に対する解釈を神話や伝承を含めたさまざまなソースをもとにして吟味し、なおかつ現在、そうした村人の解釈する家屋のイメージがどのように変動しているのかを追跡する必要がある。今後の課題としておきたい。

タイのアカでは、ジェンダー関係と家屋の空間組織の連続性がそこに住むアカ自身によって多様に語られるという特徴がある。そうしたアカ自身の解釈をなぞるように、男女はそれぞれの部屋で別々に分かれて生活する。しかし、H 村の家屋では、一見、北タイのアカと類似した空間組織を持ちながら、ほとんどの家屋で夫婦は同衾し、そのための部屋が内部に仕切られている。このような様態を当地のアカがどのように説明するのか、その論理をあきらかにすることも今後の調査の課題である。

参考文献

Lewis, P.
1989 Akha-English-Thai Dictionary, Chiang Rai: Development and Agricultural Project for Akha (DAPA).
清水郁郎
2005 『家屋とひとの民族誌―北タイの山地民アカと住まいの相互構築誌―』風響社。
Waterson, R.
1990 The Living House: An Anthropology of Architecture in South-East Asia, Oxford: Oxford University Press.

(Endnotes)

[1] 正確には、何年前に設立されたのかについて、H 村の村人のあいだにはいくつもの説がある。

[2] この村の「副村長」のひとりは、移住の経緯をつぎのように話す。1990 年ごろ、この村が立地する山地とは別の、ブンヌアの近くの山地に N 村という村があった。中国から越境した当初、住人の多くはその村に移住した。そのつぎに、この H 村に移住したという。

[3] ここでは、家屋戸数と世帯数は相同とみなしておく［cf. 清水 2005］。

[4] この女性の家は、ブンヌアに近い村にある。そこでもともと商店を開いていた。H 村の村人は彼女の商店で買い物をすることが多かったが、そのさいのつけがかなりの額になった。しかし、H 村の村人たちはその借金を返そうとせず、しかたなく催促ついでにこの村で商店を開業したという。

[5] 現地語の表記は、ルイスの編纂した辞書にならった［Lewis 1989］。ただし、声調記号は省いた。ルイスの辞書は、ビルマに居住するアカのダイアレクトを中心に編纂されているので、この地域のダイアレクトとは相違も数多い。そうした場合、ルイスの辞書にならって表記するようにつとめた。

[6] もともとのローカルタームをこれらのように日本語表記する根拠は［清水 2005］を参照のこと。

[7] 月に 5 万 4 千キープが政府から支給される。

[8] ひとりの男性老人がこの役を担っているが、能力的にそれほど卓越した人物ではなく、儀礼的治療はほとんどおこなわないとされる。また、「暗唱者」も、すでにそうした役職から下りたとされている。

[9] タイのアカの事例では、この門は、人と霊的存在を分ける指標と認識されている。そのベースになるのは、人

と霊的存在の分離である。それを説明する神話的語りにはいくつかのヴァリエーションがあることが知られているが、そのひとつはつぎのようなものである。かつて、人と霊的存在は、ひとつの家屋に居住していた。しかし、ある出来事をきっかけに、両者は別れて暮らすようになり、霊的存在は森林へと出て行った。それ以後、人と霊的存在は相容れない。門は、霊的存在の居住領域である森林と人の居住領域である村を区別するために建設されるようになった。

[10] タ・センは、郡と村の中間に位置する行政区分だったが、現在では存在しない。

[11] 近年、チークの苗を村に持ち込み、それを村所有の土地の一画に栽培させている中国人の商人がいる。2004 年までに、チークは 10m ほどの高さに成長している。

[12] dzi dzi は k’aw meh、yu g’a は k’aw bi と呼ばれる場合もある。これは、タイのアカの場合と同じである。

[13] たとえば、ムワンシンのアカの家屋やポンサリー県に居住するアカでも、ほかのサブ・グループに属するアカにはみられない。

[14] この木は、構造材として家屋に頻繁に使われるマイ・トゥロである。